

災害ボランティアセンターの限界と可能性

～「遊動化のドライブ」を駆動するために～

減災復興政策研究科 減災復興政策研究専攻

准教授 みやもと たくみ 宮本 匠、◎D2 よりまさ りょうた 頼政 良太

キーワード

社会福祉協議会, 災害ボランティア, ボランティアセンター, 秩序化のドライブ, 遊動化のドライブ

研究概要

災害が起きると社会福祉協議会（以下、社協）が災害ボランティアセンターを設置することが当たり前となった。一方では、災害ボランティアセンターがあることによって、多くのボランティアが参加しやすくなった部分もあるが、他方では、その活動の限界によって被災者のニーズが取りこぼされていると言われている。例えば、応急危険度判定によって危険と判断された家は活動できない、障害者など配慮が必要な方への支援が行き届かない、などである。これらの問題は社協が抱える制度的制約、組織的制約、資金的制約の三つの制約によってもたらされている。制度的制約は、ボランティア保険による保証範囲が限定されていることや、社協本体の活動の委託業務が多くなっていることが挙げられる。組織的制約は、行政との関係性によって社協の災害ボランティアセンターの運営も左右されることがある点である。資金的制約は、介護保険事業によって大半の収入を得ているため事業を止めれず人を割けないなど、社協の賃金体制に関する問題がある点である。これらの問題によって社協の災害ボランティアセンターは、臨機応変な対応ができず運営が硬直化し、災害ボランティアセンターの活動に限界が訪れてしまう。このような硬直化を渥美(2014)は、「秩序化のドライブ」と呼んでいる。そして、この硬直化を乗り越えるためには、目の前の被災者に対して臨機応変に対応する「遊動化のドライブ」を駆動させることが重要だと主張する(表1)。「遊動化のドライブ」を駆動するためには、災害時に他の支援団体や地元ボランティアとの連携を進めていく必要がある。さらに、社協本来の業務に着目してみると、対象者に対して面的な支援を実施するのではなく、必要な支援をカスタマイズしていくような即興的支援を得意としている。これはまさに「遊動化のドライブ」であると言える。災害ボランティアセンターの限界を乗り越えるためには、本来の社協の持つ「遊動化のドライブ」を駆動する環境づくりが重要である点を考察する。

参考文献:渥美公秀(2014). 災害ボランティア
弘文堂

表1 「秩序化のドライブ」と「遊動化のドライブ」
(渥美(2014)をもとに筆者作成)

	秩序化のドライブ	遊動化のドライブ
被災者	中心にはいない	中心にいる
臨機応変な対応	出来るだけ回避する	即興的に対応する
秩序	守ろうとする	必ずしも守らない

アピールポイント

筆者は、国内外の20以上の災害現場で支援活動を実施した経験があり、本研究もそれらの支援活動を通じたフィールドワークによる成果と、得られた知見をもとに考察を行っている。そのため、本研究は極めて現場に近い位置での研究であり、考察も実践的なものとなり、成果をすぐに現場に還元することができる。成果を還元することでより良い災害ボランティアセンターの運営が実現でき、被災者支援がより円滑に行えるようになる。